



Title	現代日本語の数量を表す形容詞の研究－段階形容詞としての性質に基づく分析－
Author(s)	包, 雅梅
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/97193
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (包雅梅)	
論文題名	現代日本語の数量を表す形容詞の研究 一段階形容詞としての性質に基づく分析—
<p>論文内容の要旨</p> <p>本稿の目的は、現代日本語の数量を表す形容詞の「多い、少ない」が装定用法と述定用法において使用制限がある理由を論じることを通して、現代日本語の数量を表す形容詞の本質を明らかにすることにある。具体的には、「多い、少ない」は、他の形容詞と異なり、単独で装定する例がほとんどない。また、「多い、少ない」は単独で述語として主題に対する叙述を行うこともできず、「～が{多い／少ない}」のように「一つの意味的なかたまりをなす」形容詞句となった上で主題に対する叙述を行う必要があると指摘されている。また、この「多い、少ない」の使用制限の理由を説明するにあたっては、「多い、少ない」の類義語の「おびただしい、膨大だ、豊富だ、潤沢だ、希少だ、わずかだ」などが装定できることと、特定の文脈であれば「多い、少ない」の装定用法も可能になること、という2つのことを同時に説明する必要がある。</p> <p>本稿は、第1章から第5章までの全5章で構成される。以下、本稿の要旨を各章の構成順に述べる。まず、第1章では、本稿の研究対象と研究背景を述べる。研究背景としては、数量を表す形容詞が多くの言語で他の形容詞と異なる振る舞いを示すことから、日本語の数量を表す形容詞はたびたび研究対象となることを示し、本研究の意義を説明する。また、本稿で提示された3つの問題に対する答えも簡潔に示す。</p> <p>第2章では、主に現代日本語の数量を表す形容詞に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。「多い」「少ない」が装定用法に使われにくい理由については、主に以下の3つの立場の研究がある。1つ目は「多い」「少ない」を属性形容詞としての性質に基づいて分析するもの、2つ目は「多い」「少ない」が存在を表す述語であるという性質に基づいて分析するもの、3つ目は「多い」「少ない」が比較を表すに基づいて分析するものである。1つ目の分析については、「多い、少ない」の類義語類には使用制限がないことと、「多い、少ない」の装定用法が可能になる場合を統一的に説明できないといった問題が指摘できる。2つ目の分析については、「たくさんある・いる、少ししかない」を「多い、少ない」のパラフレーズにすることは妥当ではないことと、主節が存在文ではない場合でも「多い、少ない」は装定しにくいことを説明できないといった問題点が示される。3つ目の分析については、「多い、少ない」の装定用法が可能になる場合をうまく説明できないことと、「高い、長い、大きい」などの形容詞も相対的な性質を表し、比較基準を必要とするなどを証拠に、それらと「多い、少ない」との相違が扱えないといった問題を提示する。その上で、それらの先行研究の問題点を本稿ではどう解決するかをまとめて提示する。</p> <p>第3章と第4章は本稿の本論に当たる。まず第3章では、「多い、少ない」とその類義語の「おびただしい、膨大だ、豊富だ、潤沢だ、希少だ、わずかだ」の違いについて議論する。両者は、数量を表すという点において共通しているが、文中での機能は異なる。このことに基づき、それらの振る舞いの違いに説明が与えられる。</p> <p>日本語に関する先行研究では、形容詞の装定用法は限定する機能しか持たないことが前提となっている。したがって、数量を表す形容詞は限定する機能を持たないことから、装定はできないとされている。一方、中国語の形容詞の機能に関する先行研究では、形容詞が表す概念が有界か非有界かによって、その機能が異なることが指摘されている。すなわち、形容詞が表す概念が有界である場合、非限定的機能が働くということである。</p> <p>本稿では、形容詞が表す概念の有界性は形容詞の段階性に反映されることを示し、それを踏まえ、日本語の「多い、少ない」は非有界であるのに対し、その類義語類は有界であることを論じた。有界性を判断する基準としては、程度副詞との共起可能性、比較構文での生起の可否、比較構文で生起する場合の文の解釈、メジャーフレーズとの共起状況といったテストを用いる。テストの結果として、「多い、少ない」はさまざまな程度副詞と共に起き、比較構文に現れ、段階構文でも正規可能なため、段階形容詞であり非有界であると言えるが、「おびただしい、わずかだ、膨大だ」はほとんどの程度副詞と共に起きず、比較構文にも現れないため、非段階形容詞で有界で</p>	

あると説明した。「豊富だ、潤沢だ、稀少だ」は一部の程度副詞と共にでき、比較構文にも現れるため、「多い、少ない」と同様に段階形容詞であるが、それらが比較構文で生起する場合、比較対象と比較基準の両方が「豊富だ、潤沢だ、稀少だ」という前提が含意される点において、「多い、少ない」とは異なることを議論する。また、「豊富だ、潤沢だ、稀少だ」がメジャーフレーズとも共起できないという振る舞いを示すことから、段階形容詞で有界であると分析した。

以上の議論から、第3章では、類義語類が持っているのは非限定的機能であるため、被修飾名詞の属性を表さなくてよいことを主張する。

第4章では、「多い、少ない」に使用制限がある理由と、特定の文脈であれば「多い、少ない」でも装定用法が可能になる理由について説明する。具体的には、本章では、「多い、少ない」は「高い、長い、深い、広い、大きい」のような段階形容詞と同じく、Kennedy & McNally (2015) らが言う段階形容詞であり、段階形容詞のスケールに個体あるいは集合を写像する測量関数 (measure function) であると説明する。

そして、本稿では「次元が成り立つ領域」という概念を提案する。具体的には、「多い、少ない」は他の段階形容詞と同じように、「XはYが〈段階形容詞〉」、「Yが〈段階形容詞〉X」のように、「Yが」によって「次元が成り立つ領域」を決める必要があることを議論する。例えば、「クジラは大きい」が成り立つの「クジラは大きさが大きい」のように、次元が成り立つ領域が指定されているためであり、この場合には、クジラは動物のサイズを表すスケールに位置付けられる。

一方、「Xは {数／量} が {多い／少ない} 」、「 {数／量} が {多い／少ない} X」のように、「 {数／量} が」を補っても、文が容認されないままである場合も多い。この現象に対して、本章では、数あるいは量が「次元が成り立つ領域」になるための条件を明らかにすることで説明を与えられることを示す。すなわち、主語名詞句と被修飾名詞句は「数／量」という側面を持ちうるものでなければならないという条件である。「数が {多い／少ない} 」の「叙述／修飾」を受ける名詞は1つの集合、あるいは1つの種類のものを表すものであり、「量が {多い／少ない} 」の修飾を受ける名詞は個体ないし1つの種類を表すものであることが示される。

この議論を踏まえた上で、「多い、少ない」の叙述あるいは修飾を受ける名詞は、1つの集合、1つの種類のもの（〈定〉集合）、一つのもの（個体）であることを示す。その場合、「(Xにあたる主語) 大主語／被修飾名詞」自体が複数であるといった意味や、大量・少量にあるという意味は表されていない。「多い、少ない」は、段階形容詞でありかつ測量関数としての意味を表していることから、その集合あるいは個体をスケールに写像する機能が働くと主張した。

さらに、主語ないし被修飾名詞が表すものの解釈が文脈に影響されることを議論する。それを踏まえ、被修飾名詞が同じであっても、「多い／少ない」による修飾を受けたり受けなかったりすることが適切に説明される。最後に、「多い、少ない」が個体ないし集合をスケールに写像する測量関数を表すということは、「多い、少ない」がそもそも被修飾名詞の数量を直接表さないことを意味するため、「3個の、3人の」のような数量詞、「多くの、少しの」といった連体数量詞との違いも自然に帰結することを示す。

第5章では、本稿で議論した上記の内容を整理するとともに、本稿が日本語の形容詞研究に対して持ち得る意義および本稿に残された課題を述べ、本稿を総括する。本研究では、「多い、少ない」の使用制限を解釈するにあたって、日本語の形容詞の機能、日本語の段階形容詞の性質、日本語の非有界の段階形容詞の意味といった課題に関する議論も行う。

今後の課題として、本研究の研究対象と関連する3つの課題が提示される。まず、本研究では、言語化されていない意味要素の次元として「数^d」の存在を仮定しているが、「XはYが〈段階形容詞〉」において、Yが「～数、～量」という複合語である場合と「人口=人の数」である場合、Yが次元と次元が成り立つ領域の両方を同時に表していると考えられる場合もある。そこで、1つ目の課題は、言語の形式上に現れていない意味要素の存在を仮定することのメリットが他にあるかを検証すること、さらには、意味要素がどのように言語形式として具現化するかについて考察を深めることにある。そして、本研究では、「多い、少ない」が存在の意味を表すこととその使用制限の関係を第2章で議論し、存在意味説の問題点を指摘したが、「多い、少ない」は存在構文に特徴的な二格と共起できるにもかかわらず他の段階形容詞が二格と共起できないことも事実である。2つ目の課題は、「多い、少ない」が二格と共起できることがどのようにそれらの振る舞いに影響するかを考えるというものである。最後に、本研究では、「多い、少ない」は段階形容詞であり、主語ないし被修飾名詞が表すそのものの数量を直接表さず、個体ないし個体の集合をスケールに写像する測量関数を表すという分析に基づき、それらの使用制限を説明した。しかし、「多い」と「少ない」は完全に同じ振る舞いを示すわけではない。したがって、3つ目の課題は、「少ない」の方が装定できる例が多いことの原因を明らかにするという点にある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏名 (包雅梅)	
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	今井 忍
	副査 教授	岸田 泰浩
	副査 准教授	山泉 実
	副査 教授	莊司 育子
	副査 准教授	山川 太

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の数量を表す形容詞「多い」「少ない」の使用制限について論じることを通して、現代日本語の形容詞の特質を明らかにする研究である。「多い」「少ない」は、装定用法において使用の制限があることが知られている（「*多い人が庭に集まっている。」「*少ない本がある。」）。その一方で、同じく数量を表す形容（動）詞である「おびただしい」「わずかな」など（本論文では「類義語類」と呼ばれる）はそのような制限がない（「おびただしい人が庭に集まっている」「わずかな金がトラブルの元になることがある。」）。通常、装定用法において数量の多寡を表す場合は「多くの」「少しの」が使われる（「多くの人が庭に集まっている。」「少しの本がある。」）。本論文は、形容詞一般の性質と数量の多寡を表すという意味的な特異性からこれらの現象を説明しようとする。

研究対象と研究背景を述べた第1章に続き、第2章では先行研究とその問題点について述べられている。「多い」「少ない」の装定用法における使用制限について、先行研究の立場を大きく3つに分類している。まず、「内在的形容説」は、「多い」と「少ない」が被修飾名詞の内在的性質を表すことができないため装定ができないものであるが、これには、装定が可能な場合についての説明が十分になされていないこと、同じく数量を表す類義語が装定の制限を持たないことが説明できないことを問題点として挙げている。次に、「存在意味説」は、「多い」「少ない」が存在の意味を含むために装定ができないものであるが、これには、主節が存在文でない場合でも装定が不可能であることが説明できること、存在文に生起する形容詞でも単独での装定が可能であること、存在の意味の規定が曖昧であることを問題点として挙げている。最後に、その他の説として、「多い」と「多くの」、「少ない」と「少しの」の違いから制限を説明する研究、述定用法における制約に着目する研究、「多い」が数量詞と相対形容詞の両方の性質を持っていることから制約を説明する研究を挙げ、それぞれの問題点を論じている。

第3章では、「多い」「少ない」とその類義語類との違いについて議論している。従来の研究では、装定の機能は限定であることが前提とされてきたが、本論文では、中国語に関する先行研究に基づいて、形容詞の性質によって装定の機能が異なると主張し、類義語類は「多い」「少ない」とは異なる性質を持つ形容詞であるため、装定の制限について異なる特徴を示すと論じている。程度副詞との共起可能性に基づき、「多い」「少ない」は段階形容詞で非有界であるのに対し、類義語類のうち「おびただしい、わずかだ、膨大だ」は非段階形容詞で有界であり、「豊富だ、潤沢だ、希少だ」は段階形容詞で有界であることを示し、その違いが装定の可否の原因となっているとする。

第4章は、第3章で論じた段階形容詞の特徴とその日本語における具現化のあり方に関する議論である。本論文は、形式意味論の枠組みにおける先行研究をベースにして、段階形容詞をスケールに個体あるいは集合を写像する測量関数であると規定するが、その一方で、先行研究では次元の定義に曖昧性があることを指摘し、次元以外に次元が成り立つ領域という概念を導入することで、日本語の段階形容詞の振る舞いを説明する。これにより、「XはYが<形容詞>」という構文において、Yが次元が成り立つ領域に対応すること、これは「多い」「少ない」だけでなく「高い」「大きい」も含めた段階形容詞一般について成り立つ特徴であると主張する。その一方で、「高い」「大きい」にあって、「多い」「少ない」にはない特徴として、前者が領域表現を省略することができるのに対し、後者はそれができないことを挙げる。このことから、「多い」「少ない」が単独で装定、述定の位置に生起しにくいことを説明する。さらに、「多い」「少ない」の次元が成り立つ領域として「数」「量」があると考え、それらは装定用法における被修飾名詞、述定用法における大主語が文脈上「数」「量」という側面を持つと解釈できる場合にのみ生起することができ

ると考える。さらに、「多い」「少ない」と「多くの」「少しの」との相違点については、後者が段階形容詞ではないため、直接被修飾名詞の数量を表すことができることに由来すると論じる。

本論文は、「多い」「少ない」の使用制限という一見些末に見える問題を論じることを通じて、これが、連体修飾が持つ機能、形容詞の多様な意味的特徴、名詞句の解釈のあり方といった多岐に渡る一般的な問題と関わっており、それらが複合的に働いて生じるものであることを、豊富なデータと明確な理論的枠組みに基づいて示している点で高く評価できる。日本語学だけでなく、英語学や中国語学の研究成果も採り入れた幅広い視野を持ちつつも日本語のデータに即した緻密な分析がなされている点も特筆に値する。総じて、言語現象に即した実証的な側面と理論的な整合性とのバランスが取れており、記述的にも理論的にも重要な貢献となり得る研究であると言える。

その一方で、論述の仕方にややわかりにくい点があることは否めない。特にこの論文の中心とも言える第4章は、数多くの論点が十分に整理されないまま提示されており、個々の論点が全体としてどのように統合されているかが見えにくくなっている点が惜しまれる。

しかし、これは些細な瑕疵であり、従来指摘されつつも十分に解明されてこなかった現象に対して新たな視点からアプローチを試み、一貫した説明を与えるのみならず、今後の研究のさらなる発展の可能性を示すことができたことは高く評価できる。

以上の評価に基づき、本論文が博士（日本語・日本文化）を授与するに値する優れた研究であると判断し、審査担当者の全員一致により合格と判定した。